

まじないじいや

雪の上に、小さな獣の足あとが点々と入り乱れて、藪の中へと消えている。

「ウサギだな」

いつもなら、あとを追いかけてつかまえてやるところだが、今日のトシオはそうせずに、長靴の先を、スキー板の皮ベルトにひっかけ、かかとのバックルを締めた。久しぶりの快晴に三月の堅雪がキラキラと光っている。

スキーは快調に滑り出す。竹ストックで雪面をガンと突くたびスピードが増し、ザー、シャシャーと斜面を滑り降りる。炭焼き小屋の前をあっという間に通り過ぎると、小屋から出てきた裏の家のじいさんが、目を丸くして言った。

「なんだって早えごど。ヤタガラスが飛んでったかと思ったわい」

トシオはうれしくてたまらない。風がほっぺたを突き刺すが、それすら痛快で叫びたくなる。

木立ちを器用に避けながら、調子よく滑っていたその時だった。ドシン！ ひどい衝撃とともにトシオは盛大にもんどりを打った。身体を動かそうとすると、左肩が火のように熱い。どうやら立ち木をよけそびれたようだ。トシオはしばらく寝ころんだまま、青い空を眺めていた。

雪が冷やっこく背中にしみ、お日さまが顔を温める。

「なんだべ、おれの体ん中でとぷとぷ冬が融けてくみてだな」

なんだかおかしくなって、うふふと笑うと、やっぱり肩がぎりぎりとなミを突き立てたように痛むのだった。

トシオはなんとか起き上がると、スキーを立ち木にゆわえ、そろそろと山を下りた。こうとなったら目指すのは山裾のまじないじいやの家だ。

「なじよした、トシオ。またどっか痛くしたのが」

まじないじいやは、短く刈った白髪頭をふりふり奥から出てきた。

頭痛も腹痛も歯痛も不眠もたいていの不調はまじないじいやが治してくれる。赤ん坊の夜泣きだってお手のものだ。ふたつになるいとこの疳の虫を退治しているところは圧巻だった。まじないじいやがいとこの顔や手を筆でなでると、小さな指の間から白い煙がするする一と出てきたのだ。それを目撃して以来、トシオのまじないじいやへの信頼は絶対になった。

不思議なのは、まじないじいやは大昔からまじないじいやだったことだ。父ちゃんがこどもの頃まじないじいやの世話になり、そのときもまじないじいやと呼ばれていたというのだから「二百年や三百年は生きてっかもしんに」と、トシオは密かに疑っている。

「これはだいぶひどくぶつつけたな」

まじないじいやは、目をぎろりとさせていった。

「スキーで木にぶつかった」

「この堅雪ではスピードも出っぺもの。なにほどおもせがったべ」

「せっかく今日は一日スキー滑んべと思ってたのに。ああ、やんだぐなっちま」

「そりゃ残念だなあ。ちっとばかし腕が足んにがっただなあ」

まじないじいやのいいところは、こどもの冒険や失敗を危ないと叱るでなく、むしろ共犯者のような顔をしてくれることだとトシオは思う。

まじないじいやは、いつものようにトシオの体をさすったり、トントンと叩いたり、何か唱えながら札を貼ったりした。するとトシオはふわっとしたような眠たいような気持ちになって、気が付くと痛みが消えているのだ。

それでも今度ばかりは傷が深かった。しばらくの間、学校の行き帰りにまじないじいやのところへ寄り、痛みをとってもらっていたが、やがて傷口が膿んで腫れ、熱まで出てきた。

「これはもう、お医者の出番だな」と、まじないじいやもいうものだから母ちゃんはトシオを町の病院へ連れて行った。

「いや、これは。よくこうなるまで我慢したな。よっぽど痛かったべ」

医者は、トシオの傷を見るなり驚いたようにいった。実際は、まじないじいやのおかげでほとんど痛まなかったのだが、トシオは少し得意そうに歯をくいしばって見せた。

「すぐに手術だ。だけど、かなり痛いぞ。坊主、がんばれよ」

町の病院といっても、戦争で何もかもが不足していたから、麻酔なしで患部を切開するという。

医者がメスを手にすると、トシオはきつく目をつぶり覚悟をした。

「しっかりまじなっておくからな。さすけねぞトシオ」

まじないじいやがそう言ったんだから、絶対大丈夫だ。多分大丈夫だ。

メスが肩先に入ったその時、トシオは不思議な光景を見ていた。あれはまじないじいやの家だ。茅葺屋根の上を何かが飛び回っている。よくよく目をこらすと、真っ赤な顔にびっくりするほど高い鼻を突きたてた天狗だ。天狗が背中の中をパタパタいわせ、まじないじいやの家の上空をぐるりぐるりと飛び回っているのだ。突然、天狗が真っすぐにトシオを見た。その目がぎろりと光り、トシオの中に射こまれた。

「はい、終わったよ。もう大丈夫だ」

ぎろりの目が膿のように消え、代わりに医者の顔があった。

「ちょうどいいところで気絶したな」

医者はそういつてにやりと笑った。

天狗は夢だったのかどうかわからないまま月日が過ぎた。夢でも本当でもどっちでもいいような気もしていた。トシオはそれから何度も怪我をしては、まじないじいやの世話になった。テストで点がとれるようにまじなってくれと頼んだ時は、「へでなし語ってんでね」とさすがに怒られたが、それ以外は、「これでまあ、さすけねべ」とまじないじいやがいえば、大概大丈夫なのだった。

やがてトシオは上の学校へ上がり、町へ出て大人になり、かわいいお嫁さんをもらった。一年前には女の子が生まれた。そして今、その娘をおぶい、トシオは久しぶりにまじないじいやの家を訪ねたのだった。山裾のその家は、茅葺屋根がトタン屋根に変わってはいたが、ほとんど昔のままだ。

「久しぶりだなトシオ。今日はどこ痛くしただ？」

まじないじいやもまた、ほとんど昔のままだった。

「今日はこの子を頼みます。夜泣きがひどくて」

トシオは背中の子をまじないじいやに見せた。

「ほう、トシオのややつこのころにそっくりだな。こりゃ疳が強えぞ」

まじないじいやはぎろりの目を細め、嬉しそうにいった。